
Main chapter in Series of Lour **ラウルの少女が歩む世界**

心機一転気合い一発！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Main chapter in Series of Lou
r ラウルの少女が歩む世界

【Nコード】

N2633T

【作者名】

心機一転気合い一発！

【あらすじ】

警告！ この小説にはタグが示す通り、暴力シーンが『多く』含まれております。苦手な方はご注意ください。

ラウル族の少女が歩む世界シリーズ本編 とある異世界。そこでは、その全員が、先天的に特異な能力を秘めていると言う、ラウル族と呼ばれる種族が、圧倒的な迫害を受け続けていた。隠れ住むことでまでも、仮初の平穏な毎日をごすことだけしかできない。そんな中、一族の中でも、類まれな能力を持つ少女が、奴隷の

身分に落ちた。隙を着いて、逃げ出す少女。最初は、それは小さな歪でしかなかったが、歪は大きくなり、ついには世界を大きく揺るがすことになる。これは、そんな少女が歩く、異世界の物語である。

第一回 日常の終わりは、日常の始まりに

その日、病的なまでに白い肌に、真っ白な髪、血のように不気味な赤い瞳を持ちながらも、見る人によつては絶世の美女にも思える少女、レイル＝サルヴァーンは、魚釣りをするため、人気の無い森の中に作られた集落の付近を流れる、沢に出かける予定でいた。それにしては、若干遅くまで寝ていたが。

レイルは目を覚ますと、ベッドから下り、化粧台にある鏡を見て、引き出しの中にあつた櫛を使って梳きはじめた。

膝くらいまである髪を櫛で梳くの中には、かなり時間がかかる。長閑な村では、怒られても文句言えない時間まで寝室にいる彼女を、食事を促しに呼びに来るのは母親だ。

「起きた？ ご飯出来てるから」

そんな言葉を相槌を打って聞き流し、髪を夢中で梳く。彼女にとって、それはその日の予定に思いを馳せる、至福の時間であつた。

長閑な集落でも、毎日が楽しく感じる事が出来る。何せ、自然が豊富で、それを利用した遊びはいくらでもある。

釣りは、その中の一つである。

そんな集落ではあるが、周囲に人気がない故に同種族のもの以外では他の人里との交流もあまりない。

そのような立地条件の場所に集落を築いた理由は、専ら集落に暮らしている人々の種族の特徴にある。

集落に住まう人々は、その全員がラウル族という種族である。

ラウル族は、人間にそっくりの容姿で、唯一の違いは背中にあるラウル族特有の『ラウルの紋様』と俗に呼ばれる痣のような斑点の有無だ。黒子とは違い、それは木々の葉のような緑色をしており、暗闇では優しげな緑色に発光する。

そして、最大の特徴は、その力にある。俗世間では『秘術』と呼ばれるそれは、秘術などではない。

なぜなら、秘術ならばそれには決まった法則がある。だが、ラウル族が持つ力には法則などなく、その力を持つものにしか扱えない。他の種族でも、稀にそういった魔法では説明つかないような力、例えば『封陳紋』という、封魔（魔法や魔力を封じる特殊な力）を扱うことが出来る力や、言霊使い（発言した通りの自称を引き起こす特殊な力）等があるが、ことラウル族の所持率百パーセントには遠く及ばない。

ラウル族を除いてのトップ、魔族であつてもせいぜいが千人に一人いればいいほうだ。

ラウル族は、そういった魔法ではない特殊な力、総じて特異能力を必ず先天的に持って生まれて来る種族なのである。

なのであるが、そんな特性を持つが故に、彼女達はその力を求めて、世界中から狙われることとなり、今では隠れて住むことしか出来なくなっている

髪を梳き終わると、食卓へ向かう。レイルの寝坊のおかげで、若干遅れたが、いつものように、朝食が始まった。

食事が終わると、早速といわんばかりに、レイルは自力で作った釣竿を持って、家を飛び出し、村へと飛び出して行った。

レイルの両親は、この日を境にレイルの姿をしばらくの間見れな

くなるなど、思ってもみなかったという。

村の付近の沢へと向かう途中。幼馴染の、カイとリユーイの兄妹と会った。八歳のリユーイにとって、十四歳のレイルは姉貴分な存在であった。その八歳年上、つまり十六歳のカイにとっても、レイルはよき友、というべきか。

ただし。カイは種族が受け継ぐ力に恵まれなかったのか、あまり生活には役立たないし、同種族からも疎まれることが多々ある。彼の特異能力は封能結界といい、彼の周辺では、たとえ『絶対』の力を持つレイルであっても、能力はかなり制限されてしまう。ただしそれは結界の有効範囲内だけであり、結界の外からならカイにも能力は通用するのだが。とにかく、ラウル族からは若干嫌われる能力であるが故に、

逆に力に恵まれたレイルが羨ましくて仕方がない。

そのため、ことあるごとにレイルに悪口を言うのだが。レイルも、それを知っているので、あえて突き放した態度はとらないでいる。

「レイルお姉ちゃん、今日は沢で釣りでもするの？」

「そうよ？　といつても、必要以上には獲らないで、必要な分を獲ったら、あとは釣つてすぐに逃がすつもり」

「ちえー。いいよな。力が強い奴は。そんなことわざわざしなくつても、お前なら魚を瞬間移動させれば済むだけの話だろう」

「それじゃあ釣りじゃなくて乱獲よ。まあ、釣りも魚達には迷惑極まりないだろうけどね。そだ、カイ達も一緒にどう？」

「行く」

「もちろんだぜ！」

「じゃ、行こう！」

今日は話し相手がいてくれて良かった、これでいつもよりもさらに楽しくなりそうだとレイルは思った。

その能力ゆえに、魚達の思考までもわかってしまう彼女にとって、むしろ釣りの時は彼についてきてほしいくらいだった。もっとも、能力を使わなければ済む話なのだが。あえて使わないように心がけるよりかは、そういった具体的な制約があったほうが、レイルとしても心置きなく楽しめるものである。

「この時期なら、アルキス（こちらでいう鮎のような魚）の塩焼きが一番上手いんだよな」

「あゝ、それは言える。あれはおいしいよね」

「私もあれは好きかな」

「ははは、これは今日はアルキスが取れたら塩焼きにするしかないですぞ、姫」

「そうだねえ……あー、ごめん。……塩、持って来れば良かったな」

素直に塩を持ってきていないと申し出るレイル。冗談で言っただけに本気にされたカイは、どうごまかそうかと考え、こう返した。

「馬鹿言え。お荷物になるだろうが」

「……。でも、塩だけじゃ大して荷物にならないよ？」

「あ、そーいえばそーだな。ははは」

「ふふふ………」

そういつて、そう言えば匂といえば森の木ではあれがたくさん取れる、とか、今の時期はあの猛獣が出るからあの辺はよしておこうなという会話で盛り上がりながら、沢にたどり着いた。

沢に着いた、までは良かったかもしれない。そこまでは、レイル

の予定通りであった。

だが。そこには先客がいた。

一人は、燃えるような赤い髪に、漆黒という言葉こそが似合う黒い瞳の女性だった。

黒い瞳。その特徴を、レイル達は知っている。それは魔族であった。ラウル族、唯一の交易相手。ラウル族以外で、一番特異能力を持つ可能性が高い種族。

『さつさと立て！』

『……放して……お願いだから……』

だが、その女性の首、手首には、黒く、光沢がある輪……俗に言う首枷が嵌められている。傍らには、女性が持つにはたくさんすぎる荷物。そしてお金の入った袋。ようは行商人である。

そして、首枷につながる鎖を引いているのは、どつぷりと太った、いかにも金に目がなさそうな醜悪な顔つきの男性である。

「何、あれ……」

「マジ、だろ……最悪だ……」

「え……？ まさか！」

予想は半分ついていた。だが、過去にそれとの遭遇歴があるというカイの『最悪』発言から、それを現実として受け止める。

『……ッ！』

『さつさと立たんか！』

村では、正義感があると人気だったレイルは、ただ打ち据えられる女性を、見ていられないとばかりに、立ち上がろうとする。だが、それを制するものがある。

「馬鹿か！　いつものお前ならともかく、今日はやめておけ！　俺と一緒に無理だろ！　能力だって、万分の一も使えないだろうが！」

「でも！」

そうしている間にも、摩族の女性は痛みを耐えかね、とうとう男の言葉に従う気になったようである。

そして、付近に止めてある馬車へと、導かれ、そこで足を止めた。

『さっさと入れ！』

再び抵抗の意を示す女性に、容赦ない一撃を食らわす男。そして、押し込まれる女性。

それらを見ていたレイルは、ついに本気で怒り出した。

第二回 報酬より依頼を重視するは裏便利屋

この世界には、奴隷制度というものが存在している。その対象となるのは、上は貴族から下は貧困層まで、実に幅広い。

そして、その奴隷制度こそが、ラウル族が隠れ住む最大の理由で、またラウル族こそが、奴隷制度誕生のきっかけであった。

強い力を持つもの達の行く末は、拝まれるか、非難されるか、そしてそんな力をどうにかねじ伏せて支配するか。ラウル族に対して行われた行為は、ねじ伏せることだった

「何だお前は？」

「さっきの人を放して！」

突如現れたレイルに、大した頓着も示さない男。そんな男に、女性の解放を求めるレイルであったが。当然、男のほうも、こういった自体に何の対処も打ってないわけではなく。

突如、レイルを横から来た衝撃が襲う。

「あ……う、」

殴り飛ばされ、着地した地点から五メートル程転がってやっと止

まる程の衝撃に突如襲われたレイルは、何とか立ち上がることが出来た。

が、すぐにその後ろに回られ、背後を取られた。いや、元々数名、人員が用意されていたのだろう。

そして、その手に持つもの　手枷と首枷に目を止め、距離を取ろうとするが、

「……、」

そうする前に素早く襲撃者の手がレイルの腕を後ろへ振りあげた。

「うう……く、っ！」

痛みに呻く。そして、もう片方の腕も、後ろに回された。

手早く後ろ手に固定され、逃げる間もなく首枷も嵌められる。まさに、瞬く間といえる手早さで。

枷に繋がる鎖を掴まれ、最早、レイルは逃げる術を完全に失ってしまった。

（油断、した……。一人じゃなかった、なんて……）

早まった、と後悔したところで、もう遅い。これから始まるであろう、地獄の日々を思うと、泣かずにはいられない。

それから時間が経ち、一騒動終った沢には、静寂が漂う。

レイルは、騒動の末、奴隷商達に気絶させられていた。傍らには、女性が「レイルちゃん……ごめんなさい……私のせいで」と泣きながら、しかし何もできずに座している。

レイルがその身を拘束されてから、若干静寂が場を包んだ。

その憎悪をたつぷりと含んだ視線の先には、奴隷商の、でっぴりと太った男がいる。

男は、金目のものを探して女性のに物を漁っていたが、殆ど何も見つけれなかったようだ。そして、そのごく僅かに見つけた価値あるものの一つが。

「これは……ラウル族の間で使われている硬貨……。ということは、成る程成る程……この付近に、『ある』わけだな……」

「……ッ!？」

ラウル族に纏わる情報である。

だが、それに反応したレイル。集落に住んでいたレイルとしては、自身が最終防壁なのだ。黙って見ているわけにはいかない。

「させない!」

「ぐふああ!？……貴様ア……」

「……くう……、はあ、はあ……貴様、なんかに……集落には、行かせない!」

再び沸き起こる、反抗心。

だが、それも決して長くは続かず。最初の一撃が、限界だった。

まず、カイの封能結界の範囲からは既に抜けているが、代わりに先程付けられた枷によって、結界の足元には及ばない程ではあるが制限がかかっている。

「くつくつく……どうだね、封能の首枷は。特異能力を思うように扱えないだろう?」

「くつ……はあ……、はあ……」

その制限のせいで、普段よりも酷く過剰に体力を消耗する。既に、レイルは立つのも精一杯の状態だった。それに加え、

「……見る」

「な、に? ……あつ!」

女性を人質に取られていたのだ。さらに、

「今、俺とお前は一方的ではあるが思考が若干リンクしている。……下手に力を使えばどうなるか……わかるかな?」
「……………く……………」

能力を使用しようとしても、首枷が『所有者』にその旨が送られてしまう。

つまり。

女性を人質に取られていては、現状では下手に能力を使えないのだ。その上、枷には能力を使っても効果を為さない。

どうか、みんな無事に逃げて、と。

特異能力で、カイが既に避難を促したこともあり、集落には一人居ないことを知っているレイルは、そう願うことしか出来なかった。

「くそっ！ 集落は見つけたが、人っ子一人居なかった！」

戻ってきた奴隷商は、そう悪態をついた。
そしてレイルを見ると。

「このっ！ くそっ！ よくもまあ、余計な真似をしてくれたものだな！」

「あう！ ツ、う ああああああ」

最早、その扱いは言葉に出来るようなものではなく。

容赦ない暴行を受けたレイルの意識は、既に朦朧としていた。

「ごめん 本当に、ごめん、」

女性は、せめてと思い、治療魔法を使って、応急手当をした。

「 この少女には若干同情するな 」

キッ と、鋭い視線で監視をしていた男の一人 レイルを最初に横合いから攻撃した男を睨む。

「だったら！ 何で見逃してあげなかったんです……。 たったの……、 たったの十四歳なのに……」

「何っ！？ …… そんな子供までも捕まえるとは聞いてないぞ？

……これは契約違反だな……」

あの野郎、騙しやがったな、と反感を口にする男に対する視線を弱めることなく、容赦無く言い放つ魔族の女性。

「契約……？ じゃあ何です、今更になって、私達を解放するつもりなのでしょうか！」

だが、女性の言葉に、男は不適な笑みを浮かべた。

「クッククク……俺を見くびるなよ……？ この裏便利屋……。 信頼を裏切ればどうなるか……わかっててやったのだから……」

そのどす黒いオーラに、女性は、怒りを忘れて、ただ男が何をするつもりなのか、その心中を計り兼ねるとばかりに見つめた。

「……う、ん……」

レイルの意識が覚醒し、若干身じろいで起きたのはその最中だった。

第三回 それは予知夢か否か、訪れた好機

ここは何処だろう……。
暗い……。

私、どうしたんだっけ……。

『レイル……息災を祈ってるぜ。じゃあな』

カイ？

『レイルお姉ちゃん。元気だね！ 体に気をつけてね？』

リユーイ……？

二人とも、どこ行くの？ 待ってよ。

『お前なら、きっと俺達のところへ戻って来る！』
『信じてるからね、レイル！』

お父さん？ お母さんまで！

『じゃあな』

『どうか、貴方を置いていく私達を許して……』

待って！

私も行く！ 皆についてく！

ジャラ……

え……ッ！？ いや！ 離して！
みんな行っちゃう！

『お前はこつちだ！』

いや……イヤイヤ……。

「イヤアアアアアアアアアッ！？」

「レイル！？」

「……無理もない。随分うなされていたようだからな」

奇声を上げて飛び起きようとするレイル。だが、腕を拘束されていては一人では簡単には起き上がれない。

「……主にその理由を作ったのは貴方方ですけどね」

冷たく言い放つ女性を余所に、レイルが辺りを見渡す。
そこは、小さな小部屋のような感じだった。
再び起きようとして、しかし腕を動かせない。
何度か試して、漸く自分の腕の拘束具に気づく。
そして、動かす度に鈍痛が走ることに気付く。

「……こっ、は……ッ!？」

「奴隷を運ぶ馬車、だな。腕は無理しない方がいい。俺の全力を受けたんだ。腕がへし折れててもおかしくない」

「念のため、応急手当はしておいたから、顔とかお腹に受けてる打ち傷とかは大丈夫だろうけど……折れた腕だけは無理ね……」

「……ッ!？ ミリ、ア……?」

何故ミリアがここにいる？ そもそもここは何処だ？

自分の記憶と、ぼんやりと聞いていた男の説明を聞いて、思い出す。

(……奴隷…… そうだ、私、…… そうだったんだっけね……)

助けようとして、結局はミイラ取りがミイラになってしまったことに、苦虫を噛み潰したような顔をするレイル。

(結局、人一人、親友の一人も私は救えなかった……)

幼少時代から、親子連れの行商人がよく集落に来ていた。だから、自然とその子供と仲良くなっていた。

それが目の前の女性、ミリアだった。

悔やんでも仕方がない。どうにかして、逃げ出せないかと考えながら、ミリアに話しかける。

「最後にあつたのは一年以上前……」

「そうだね……こっちも、猛獣にやられた父さんの後継ぎとか、ごちやごちやした後始末があつたから……」

「え!？ おじさん、死んじゃったの!？」

「まさか。でも、行商はもう無理だから、実家で万屋^{よろずや}営んでる」
「そう……。……。ところで、その服……」

ミリアは、いつの間にか麻布で作られた粗末な服を着ていた。

「……沢を出発してすぐに、無理矢理着せられた。その男にね。貴方も着せ替えられてるわ」

驚いて自身を見てみれば、確かにほぼ同じ服を着ていた。
はあ……。と溜め息をついて、改めてこのまま何もせずにことが進
行した後のことを考えて、ゾツとした。

（絶対に、逃げきって見せる……。もちろん、ミリアと一緒に！）

続いて目にはいったのは、先程対峙した時とは打って変わって、
雰囲気がいかにも味方ですという感じに変わった男。
自分がされたことを思いだし、敵意丸出しに睨みつける。

ミリアも、疑問の眼差しでそいつをみるが、やがて。

「『裏便利屋』……。聞いたことはありませんが、そうですか……。
『死に神のバンドリー』は貴方だったんですか……。」
「裏……。便利屋？ 死に神の、バンドリー？」

聞き慣れない単語に、レイルは首を傾げた。長い髪がそれにあわ
せて若干揺れるのに、バンドリーは若干顔を赤らめた。

（か、可愛い……。っと、ちょっと待て。相手は十四歳相手は子供自
分は百二十五歳年齢差百十一歳自分はノーマル自分はノーマル……。、
）

「……ミリア」

「……ん？」

若干怯えた目で、レイルはミリアのほうへ向き直り、ついそちらへ移動した。ただし、バンドリーには背を向けずに。

「……なんか非常に貞操の危機を感じるんだけど」

「……、」

ミリアもバンドリーを見る。

そして、頬を赤らめながら、必死に「ノーロリコンノーロリコン」等と唸っているところを見て、若干哀れんだ目で一瞥して、

「（……あれは重症ね……。きつと裏家業だからまともに恋愛したことないんだよ。レイルはダメだよ。あんな根暗な仕事してる人と付き合っちゃ）」

「……、（わかった気がする）」

勝手な憶測のもと、場に静寂が訪れる。しかし何処か空気が重く、よく見れば、男に敵意たつぷりの鋭い視線を送っていたレイルも、打って変わって相手を哀れむような目で見つめている。

「待て待て、何で急にそんな哀れむような目で見られないといけないんだ！」

必死に抗議するも、年頃の少女の妄想、しかも共鳴反応を起こしてより強固になった思い込みを解くするには、数十分かったという。

そんなこともあってか、バンドリーと若干打ち解けたレイルは、目が覚めるまでのことを聞いていた。

最も、事態が急変してからレイルが起きるまで、対して時間は経っていないのだが。

「で、結論からすれば、子供は狩らないというあんたの条件を彼は破ったって言うのね？」

「ああ。それについては俺とて奴を許す気には馴れん」

「よく言うわよ……。自分で捕まえといてさ……。それに、そんなこといつてるけど、ミリアだってまだ十六なんだよ？」

「……、はあ……。奴め……。まさか今までも相手の年齢を偽って俺に報告してたわけじゃあるまいな……」

今までも奴隷狩りに携わってたんだ、と若干呆れたような目で見る。

「でもさ、そんなのってどうやって見極めるの？」

「『呪い』^{まじな}属性値に恵まれた奴なら出来る。俺は残念ながら『補強』属性にしか恵まれなかったから……。狩る相手の情報については全て彼に任せていた」

「……今回が初めてじゃなかったんだ……」

ちょっと悲しそうな目をするレイル。そして、問い掛ける。

「じゃあ、彼は知ってたわけなんだね？ その、私達の年齢を……」

「……まあ、俺を怒らせたときの恐さを知っているならな」

「……なんて卑劣な奴……」

「で、貴方は奴に報復をする、と。私達は奴隷になんかなりたくない

いから逃げる……その成功〃奴への報復、か」

「なんせラウルを逃がすってことは大きいだろうな……。利害は一致してると思うが？」

「……方法は？」ミリアは期待を込めた目ではなく、不安そうな顔をして、「封印の枷つて、魔法を封じて、特異能力を制限するんですよね？ この状況じゃ私とレイルは戦力外。護衛は貴方のほかに馬車の外にあと二人。私達二人を守りながら戦うのはきついのでは？」

「……まあ、きついのはきついが、不可能ではないな。望みがある」とすればレイルか？」

「え？ 私？」

「ああ、」バンドリーは手に持った鎖の先端にある輪を弄び、「お前の能力によつては、成功する可能性はグッと上がるが……。因みにこの輪はその枷の制限を制御する働きを持つ。奴は俺を信頼しきつてお前等の監視に選んだ。それを逆手に取る。制限を解除すれば、恐らくは能力を存分に使えるはずだ。さすがに錠の部分には別に魔法が掛かっているから解錠は鍵が無いと出来ないがな」

「だとしてもさあ、」今度はレイルが疑問顔で、「こつちの手枷はどうなの？ こつちにも魔法が掛かつてるんじゃないの？」

当然の疑問である。折角の獲物を逃がさないために、首枷だけでも十分過ぎる拘束力があるのに、手枷までするくらいだ。手枷にもなにか仕掛けがしてあってもおかしくはない。

だが、

「いや。奴がケチったせいで、手枷は普通の手枷だ。首枷の制限さえ解けば、制限は無くなる」

「ふうん……」

「……で、どうなんだ？ お前の能力は、どんなもんなんだ？」

レイルは最後に、目の前の男が主張するそれが本当かどうかを吟味するために、辛くなるのを理解していて、敢えて能力を使う。

そして。裏がないことを確信すると、不敵に笑い出した。

「ふふふ……聞いたあとで、制限を再びかけるのは無しにしてよ？」

「ああ。それならば、先に制限解除をして輪を渡しておこう」

バンバリーは、鎖の先端の輪を口元に持って行き、こう呟いた。

「【汝に命ずる……。その力を以て、汝が許す限り我が力と為せ】」

ぼう……と鎖から首枷へ、まるで鎖を伝つかのように光り出した。そして、数秒経って、おさまった。

バンドリーはその手にもつ輪をレイルの手に掴ませると、若干離れた。

「それで。お前の……いや。コホン……『裏便利屋』バンドリーとしてご質問いたしますが、貴方の御力について……ご教授いただけませんか」

「……私の能力は、ね……」

若干照れながら、しかしハキハキと答えるレイルを、後にミリアはこう評したという。

「あれは、恋する乙女の眼ね！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2633t/>

Main chapter in Series of Lour ラウルの少女が歩む世界

2011年10月6日02時17分発行